

◇ 日曜日の永遠 ◇

多田龍介

◆ 目次

紅葉	5
小さな声	6
降る雪の静けさに	8
別の惑星	10
交信中	12
点	14
ショーウィンドウ	16
確かなことは	18
表紙買い	20
己の肩に世の命運が	22

日曜日の永遠	25
あるスト	27
気を持たせたいのは	29
生きづらさに	31
三つの五行歌	32
阿弥陀さま	34
ダイヤモンドの砕け方	36
日暮れ時に	38
古代の夢	40
酔いの残る朝	42
あとがき	45

紅葉

紅葉を見に行こうよなんて
陽気に君が言うから

ウキウキしながらマスクして
身支度整え

晴れた日曜日
行く、公園に

陽光は穏やか
葉脈色づく木々に
ようやく一息ついた

小さな声

たぶん知らなかったのですで謝る庶民と
知りすぎていたのですで謝る上層部が
いるのだらうと邪推する午前五時半

滑稽な顔で女の気が引けないなら

陰鬱な顔ではなお無理だろうと

この詩はどこで笑ったらしい

のでしょうかといぶかり今

読む詩はまじめに書かれ

そんなことでどう生き

て行こうというのか

誰もがカツカツで

息も絶え絶えで

息抜きにと詩

生き抜きと

論したく

身
支
度
早
い
よ

降る雪の静けさに

たとえば僕が家で毒づいてる独り言が
いわく、ファックだねとか畜生とか
それらがよそ様の心境に影響など
与えることがあつてはならない
と、愚考するのだがしかしだ
オフレコです、知らんがな
と言えない雰囲気を感じ
書いてないっちゅうん
僕はそこまで無警戒
な人間ではないが
気にしないでね
気にしないよ
ミュートだ
ミューズ
すらも

か 石
巖

別の惑星

僕が晩酌を始めるころ

サンフランシスコでは0時を回り

朝の5時に起きておはようを言う

姉上、あなたはおやすみと言

なぜなんだぜ？

同一座標でどんな時差が

僕はアサガオ

やつはフクロウというわけだ

姉弟でさえ生活に一人入ると

こんなに苦労する

誰とも暮らせない感じの
しかし寂しい僕ら

交信中

夜空に宇宙人への交信を送る

返信のない途方もない数の信号だ

諦めろんと心の声が響いている
はやぶさの応答は返ってきたが

消息不明になったのは

星の導き手だったのだから

皆が途方に暮れるのも無理はない

だから、誰であれ人を廃人になど
してはいけな

一人に対する愛は野蠻であると
ニーチェは書いていた¹

それは他の未曾有のものを犠牲に
行われるからだ

じゃ、君、乱交を勧めるというか
それもちよつと

どちらにせよ夜空で飯は食えまい
生活は地上で行われる

そのうち何とか暮らしていたら
ひよっこりふらふら宇宙人
なんてこともあるかもしれない

*1 『善悪の彼岸』 ニーチェ著 木場深定訳 岩波文庫 一九七〇・四・十六第一刷
102頁 参照

点

何かになりたくて
何にもなれなくて
といういだちを
まだ覚えてる

今はもうない
何かになったから
りゅうさんになった

りゅうさんになるとは
えらいことだよ、きみ
花の憧れ人
地獄の呪われ人

という世間の喧騒けんそうに

完全には欺かれていなかった
生活ぶり

回る世界の中で

回らない点があつたとしたら
それはここをおいて他にない

ここは静謐せいひつで不変なり

ショーウィンドウ

現代人にとって

世界はきつと丸くはなく
四角いのだ

テレビ越し

ないスマホ越し

P Cのモニター越しの
四角い世界

一つの窓からは

美女がにっこり微笑み

一つの窓からは

おいしい食べ物が映され

一つの窓からは

どこぞの絶景が見え

一つの窓からは

それらを通販できて

そして人は部屋から出ない

四角い窓越しの世界のほう
が現実らしい

町へ出てごらんなさい

どこにそんな美女がおります？

と言つてたこ殴りにされるリスク
は負えない

四角いだけに

角が立つ

確かなことは

いたはずの人がいなくなり
いないはずの人がいて

地図が変わったり
星が見えなかったり

もう何も信じられない
というときに

そう思っている僕がいる
これはまだ確かなことで

我思う、故に我ありとは
こんな深遠な懐疑の足場

として吐かれたのかなと
デカンシヨ、旦那

表紙買い

詩の即売会に行つて

たとえば僕が君の詩集を

買わなかったからといって

否定されたなどと

思わないでください

何かしら手を控える

要素があつたのかもしれない

たとえば表紙の

お手製のイラストだったり

お手製のイラストだったり

いあいあ、

イラストいいじゃないですか

まあ何かだ

盛られた詩の内容は

きつとどれをとつても

すばらしい

この末法の世にあつて

僕らの情動体験は深いから

それは予感する

そして腑に落ちるまでの

時間もかかるのだ

僕の詩もまた

己の肩に世の命運が

世界がやけを起こしてしまう
なぜ

僕が死にそうだから

僕が死んでしまうなら

もう究極的な秩序回復の

目は望めない

であればよろしい

破壊だー

という具合の

僕一人で

世界が変わるなんて

なんて単純な考えだって

そうなんですよ

そのほうが楽しいですからね



日曜日の永遠

お母さん一緒に一斉清掃に。いい絵面でもないですな、やめ
どこまでもついていけない先がある。素手で一人で挑む戦よ
行けません、髪も洗ってないですし。一人で行けば働き者だ
一人にはさせないさせるものかとぞ、孤軍奮闘、家の中では
家でだけ続く永遠、夢見てる。一步外出りや碎け散りそうな



あるスト

その意味でイリーガルだということに、耐えよとはまた何と過酷な

したいようにさせてあげればいいのです。僕のしたいことはどこかな

したくないことならいくらも思いつく。働きたくない寝ていたいと

逃げなさい。ありがたやでも逃がさない、世のしがらみがうつとうしくて

働いているではないかこれはもう立派な仕事だ、胸を張られよ



氣を持たせたいのは

針を飲む夢を見ましたチクチクと

血管が爆ぜはそうなのだと思います

寒いから縮んで伸びてを繰り返し

キープ君キープさんでもボトルなし

女のみならずや生理的に無理

岩穿うがて何年越しの狙撃手スナイパー



生きづらさに

「潔し、思えばこそその自己責任

自慰的な示威に耽って辞意至る

「他個責任、すべてはタコが悪いのだ

選べることなんてあったかいままで

（ご唱和を、俺のせいかなよそれがとぞ

三つの五行歌

お詫びだー

お詫びはどうしたー

本来なら菓子折りを持って

詫びに来ねばならぬところ

もちろん誰も来ない

いいんです

そんなとき

菩薩の心に

なることなんです

人の限界を知る

僕の労は無尽蔵だよ

いいんだよ

よくないよ

命まで取られるとなれば

戦わねばならぬ

阿弥陀さま

どうしたらいいかって

普通にしてれば

よかったんじゃないかな

もう普通が何か

わからないの

そうでしょう

普通とは

時と場所によつて

千差万別

なのだから

普遍的

という求めなら

怖いよーも

普遍的

助っけてーも

ダイヤモンドの砕け方

伸びきって千切れることがある
寄り切りということがある

瞬発的ではなくても

加圧の果てに砕けると

加圧をやめようと思った



日暮れ時に

電灯がつかないって
あなたの人生と同じで
つかなくなるんですよ
故意に壊せば
嘘と呼ばれず、か

老朽化

癖のある車のように
大事に乗らなきゃな
僕らの体
もうガタガタ

老人が生きてるとしたら
そばに吸われた壮年がいる
老人においては壮年が
壮年においては子供が
輪の外に出てもいいか

古代の夢

太陽の

下に新しきものなしという

太陽もこんなことは

想定してなかったに

違いない

インターネットが

ありましたか

あった

かもしれない

古代世界に

アトランティスが
首の骨を折ったのはここ
なのかもしれぬ
気を引き締めて
かかれたし

酔いの残る朝

また方々に失礼な

詩を書き散らし

しかし正直であることを

禁じられた文章は

半分、死んだも同然で

父母を救えぬ恐れから

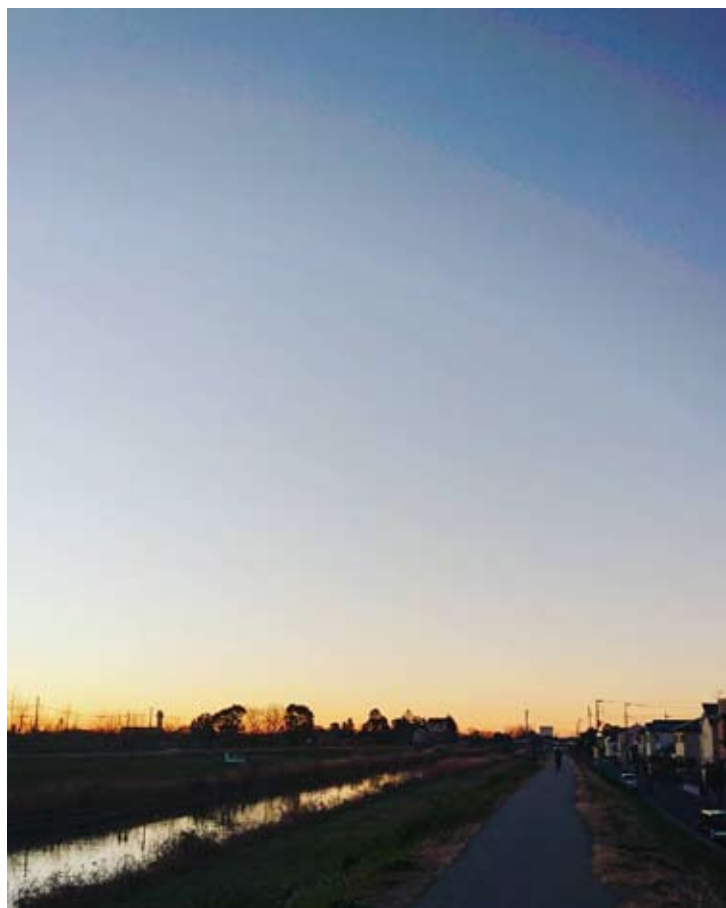
ということとは

追従者も救えぬ恐れから

何と何をも繋げなかった

酔いの残る朝

教授は賢くて
土方はバカか
逆だったりして
と茶々を入れ
貧しき者は幸いかな



あとがき

この詩集は二〇二一年十二月から二〇二三年二月の間に書いた二十編を集めて作った。前半を自由詩、後半に短歌と川柳を少しはさみ、そして五行歌の群れで締める構成になっている。五行歌とは五行で綴るという縛りだけの詩だそうで、僕も試してみた。

以前、読者の方からお叱りを受け——なぜお叱りを受けたかは詩集を読んでもいれば何となくはわかる——ここに僕の創作活動は抑制を受けたのだった。僕のナルシズムとか誇大妄想的なものと、自然な発露が制約を受け、書けなくなった。そういう時に五行歌を知り、書きやすかった。短歌や川柳もまた、書きやすかった。型がありその中で書くというのがよかったのかもしれない。疫禍がどれほど影を落としていたのかはわからない。しかし身体も心も傷もう。これについては皆の無事を祈るばかりだ。

そんなこんなで苦労があつて、出来上がった詩集である。ほぼネットに投稿した既発表作品からなるが、書き下ろしも二編入っている。その辺を楽しんでいただけたら嬉しい。

二〇二二年二月十七日

多田龍介

日曜日の永遠



著	者
多	田
龍	介
発	行
者	
多	田
龍	介
発	行
所	
明	
水	
工	
房	

令和四年二月十七日 初版発行

©Ryusuke TADA 2022

